

定本
橫光利一全集

定本
横光利一全集
第十三卷

河出書房新社

定本 橫光利一全集 第十三卷

昭和五十七年七月二十日 初版印刷
昭和五十七年七月三十日 初版發行

著 者 橫光利一

校訂者 栗坪良樹

發行者 清水 勝

發行所 株式會社 河出書房新社

東京都澁谷區千駄ヶ谷二―三三―二

電話 四〇四―一二〇一（營業）

四〇四―八六一一（編集）

振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷 多田印刷株式會社

製本 小高製本工業株式會社

Printed in JAPAN

© 一九八二

目次

書方草紙

3

先づ長さを

23

納涼

3

日記から

24

海の草

4

戦争と平和

25

感想と風景

6

富ノ澤麟太郎

26

日記

8

控へ目な感想(一)

28

名稱について

10

控へ目な感想(二)

30

急所について

11

控へ目な感想(三)

32

銀座について

12

作者の言葉

34

作家と家について

14

休息所

34

肝臓と神について

16

南京六月祭

35

連について

19

近頃の雑筆

36

旅

20

ユーモラス・ストーリー

38

春になつて

22

あんなチエホフ

41

明日

43

天才と象徴	45	日記	70
無常の風	48	枕	71
震災	50	旅行記	72
書けない原稿	52	立てる言葉	74
沈黙と饒舌	55	新感覺論	75
輕 蔑	56	客體としての自然への科學の浸蝕	82
犬養健	59	内面と外面について	84
地獄の季節	60	時評に際して	86
作 文	61	形式物と實感物	90
冬彦抄	62	新感覺派とコンミニズム文學	93
絶望を與へたる者	63	唯物論的文學論について	98
書き出しについて	65	愛嬌とマルキシズムについて	107
鍵について	67	文字について	114
チップその他	68	頂點とマックス・ジャコブと現實と	120

人間學的文藝論

123

覺書（一～五）

185

形式論の批判

134

惡靈について

211

文學的實體について

137

自然と純粹

217

藝術派の眞理主義について

140

覺書 六

219

文藝時評（一）

143

覺書 七（作家の生活）

221

文藝時評（二）

147

覺書 八

225

文藝時評（三）

158

覺書 九（傳統）

230

文藝時評（四）

166

懷疑と象徵

232

詩と小説

170

純粹小説論

233

作家の祕密

246

早蕨の艦長のこと

250

嘉村礒多氏のこと

254

第一番の喪失

255

直木三十五

257

覺書

173

日記（一～二）

173

直木氏のこと	260
古い筆	262
子路の質問	263
婦人の言葉	267
野原	270
宮澤賢治	272
思想遠近	273
「困った人達」について	276
繪本	277
北方	278
雑感	279
趣味生活	281
ぶつしゆかん	283
大阪と東京	285

285	283	281	279	278	277	276	273	272	270	267	263	262	260
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

歐洲紀行

ハンガリア行	320
イタリア行	321
スキス行	324
オリンピック記	394
オリンピック開會式	395
巴里から歸つて	398
人間の研究	402

考へる葦

靜安寺の碑文	410
--------	-----

スフィックス——(覺書)——

北京と巴里 (覺書)

支那海

覺書

考へる葦 (覺書)

ある夜 (覺書)

變性

沈黙の精神

動搖の限界

地圖の變化

地が揺れる

自然放置の杉

點線のまはり

ある愛情

479 477 476 474 473 471 470 467 459 451 446 437 429 416

機智と學生

水中の光線

力の場

島國的と大陸的

母の茶

季節

芭蕉と灰野

滿目季節

新萬葉集卷一

日記

我等と日本

508 505 500 497 495 493 491 487 484 482 480

覺書

513

新幽靈

534

灘にゐたころ

513

琵琶湖

515

刺羽集

537

おあづけ

519

季節の幻

537

日記から

539

祕色

520

大掃除の記

553

年頭の感

555

覺書

520

日記

557

希望について

526

十年間

558

山の中

527

初期の作

560

梅雨

531

ノートルダム寺院

561

羽田記

533

水上瀧太郎氏のこと

563

科學寺

方寸虛實

人物評論

戰時議會傍聽記

軍神の賦

鎌倉丸へ

選手の徳望

解題
編集ノート
栗坪良樹

鵜飼

鳥屋の夕

勝負

着物と心

解説に代へて（一）

解説に代へて（二）

591

575

573

571

569

568

566

565

586

584

582

580

578

576

定本 横光利一全集 第十三卷

書方草紙

納涼

涼しさといふと思ひ出すことは多い。私は海濱よりも湖の岸に涼しさを感じる。それも風のある水面よりも風のない水面に映る燈火の、じつと動かずにあるところ、誰の姿か殆ど影さへ見えずつただ人聲だけ、「暑い」と吐息を洩す波止場の石のあたりに涼しさがある。夕餉は器物の上の濡れた葉の生き生きとしてゐるとき、浴衣の糊の堅く脊中の皮膚に刺るとき、塵埃を拭きとつた足の裏

にまだ疊表のみしりみしりと放れがたなく鳴るときどき、世のいはゆる俗々しい月見草の名も忘れてぼんやりと河原の花を眺めるとき、——夏はすべて物の名など忘れてこそ楽しいものであるが、殊に友人知人や家の者と連れ立つて歩くときにも、それらの人々の顔を見ぬやうにふらりとし、ときには解けた帯の結ぶのも忘れて思はぬときに胸を出すなど、馬鹿馬鹿しいことの涼しく思はれるのは凡そ夏の面目であらう。宵の口に空巢を狙つて忍び込む賊の姿も何となくとぼけて賊らしくなく、怪談のとりとめなき冷たさに團扇を使つて涼しがるなど、夏は思ひもかけぬところに情趣を求めたがるものである。

あまりに暑い日には私は少年の頃の涼しかった記憶を呼び起して慰める癖がある。總て追憶といふものは涼しげなものであるが、早や忘れかけた納涼の思ひ出といふ

ものほど天國に近いものはない。殊に花火や釣りや山遊びの活潑な追憶に倦きて了つた後の、かの徐ろに浮んで来る靜かな風景、譬へば提燈の灯の下の蓮の葉や、泉水の石に冠さる苔のあたりに細々と蚊遣りの煙のなびくなど、また時として素簾の房にとまつた蛾の風と一緒にゆらめくあたり、人もなくただ桐の柾目の正しい琴の胴のぼんやりと横たはつてゐる部屋や、夏瘦せにすらりとした姿のふと門の折戸に動くときや、打水の濕つた庭で蟬の聲の遠のいてゆく夕暮れ、佛を迎へる篝火の揺らめきながら燃え上るとき、私は私達の國の古い優雅な習慣を此の上もなく喜ぶ。去年はひと夏私はどこへも行かずに暮してみた。暑さを避けて遠くへ逃げた友人達からの音信の数々も私には何の誘惑にもならなかつたのを思ひ出す。夏は暑さ故の夏である。日頃住むおのれの家の暑さも知らず秋を迎へるのは、愚な者のすることぞと思つて反つてゐた。まことに、おのれの住家の暑さも知らずに暮すものは、おのれに心の住家もないのである。

海の草

此の渚では朝と夕とに舟が出る。朝夕は満潮の砂濱に描いた曲線に海草が亂れかかり、岩は海面から浮き上つて、桃色の貝と眞砂が海の花のやうに咲き亂れる。私は鹽の匂ひを嗅ぎながら、昨夜の波の落し忘れた海草を蹴り蹴り、朝の煙草を吹かすのが好きである。此のとき、光つた岬は鮮鋭な牙のやうに海面に横たはつて、その日の吉凶を靜かな水線から占ふのだ。漁夫は岬の先端の輝きを睨つて舟を漕ぎ、昨夜篝火を焚いて出た舟は、大漁を積んでおほどかに朝日の中を歸つて来る。時には、どこからか彷徨ひ出て來た漁夫の童兒が、生々しい海べの海苔に迂りながら、鹽の匂に染つた岩角によち登らうとして勇ましく股を露はし、時には、林檎を持つた病める乙女が、海の色アサギの嚴しさに呆然として立つてゐる。

正午が來ると家の臺所は數々の魚で滿ち溢れる。鯨鯨

は踊り疲れた海のピエロ。海老は甲冑をつけて倒れた海の武者。鱈は海から吹き上げられた木葉である。これらのものが食膳に上つてばらばらの骨になると、海邊では砂の上で兒童等が大きな生活の眞似をし始める。彼等は木の枝の代りに昆布の黒い枝を持ち、片手に湯氣の立つた芋を捧げ、さて花婿と花嫁とを選び終ると光つた貝殻で賣買の成業にとりかかる。しかし、海は彼らの遊戲を浮き上らせながらだんだんと暴れ始める。波は屹立した岩にあたつて飛沫を上げ、帆は沖の水線の上で傾き、岬は噛み合ふ波頭の彼方で吠え始める。しかし、海邊に坐つた幼き花婿と花嫁の遊びには變りがない。彼らの持つた芋から、蕭條と湯氣が昇つてゐる限り、彼らは暴れ狂ふ波を恐れたことはない。

夕になると海は満面に夕日を浴びて柔かにさざめき出す。渚には漁夫の妻が、遠く沖から歸る夫の舟を眺めて立つてゐる。やがて舟が渚に上げられ、舟板が剝がれると、突如として魚を滿した舟底が、曙のやうに輝き出す。漁夫は腕を捲つて飛び跳ねる鮮魚を攫む。魚は慧敏な姿に海原を映したまま、妻の手から子の手へと渡つてゆく。妻や子供は、魚で爆けた網を背負つて、吾が家へ歸る坂道の上でよろめき出す。さうして、夜が來ると、風は渚

に上つた舟の龍骨を陣々として吹き始める。
 或る夜、一艘の舟は沖へ出たまま、永久に歸つて來なかつた。その漁夫の妻は、渚に篝火を焚いて泣きながら、いつまでも沖の方を向いて立つてゐた。三日目の朝、彼女が岩の根に海草のやうに倒れてゐるのを人々は見た。

感想と風景

家と壁

家を借りるとき、家そのものよりも周囲の庭に心を奪かれ、躍るやうな喜ばしさで契約した。契約した瞬間、ふと、「さて此の家は？」と考へた。左様に考へたと云ふ氣持の中には、家全體から受ける感じに、一點「いやだ、」と思ふ感じがあつた。どこか明るい中に不思議な暗さが何せともなく心に残つたからである。

さて、いよいよ此の家に變つて來た。すると、北に連つた壁が絶えず私の心を壓迫した。すると、私は病氣になつた。二ヶ月の間床にゐて、起き上らうとすると、俄然として母が死んだ。と、次ぎには忽ち家人が病氣になり出した。さうして一年が経過した。此の間に周囲の庭

は緑の中で苺を成らせ、葡萄の房をしだれさせ、無花果と栗と小梅の實を累々と實らせた。三人の病の上にこれらの果實が成り續けた風景はグロテスクな風味がある。昨日私の友人の小兒が死んだ。彼が新しく變つてからまだ二週間にもならないその家へ行つてみると、いきなり茶の間の壁から壓迫を感じた。私の家の壁と同じ壓迫感である。友人は門が北向きだからいけないのだと云ふ。が、私は此の壁だと云つた。變に心の眼前に絶えず突き立つてゐるやうな壁は呼吸器病を連れて來る。

新しい家を借りるときは、いつも壁を見るものだと私は思つてゐる。もし幾分の不満を忍耐して了つてゐると、いつの間にか、その一點の心の暗さが生活の中で大きな翼を擴げて黙々と運命の上にのさばつてゐるものである。

人と儀式

子供を失つた私の友人は凄じい男性的な男である。彼の云ふには、

「俺は子供が死んだ瞬間、思はず合掌したね。變なものだ。何だか儀式と云ふ奴は馬鹿に出來ないと思つた。不思議に牽きつけるものがある。」